

巻頭言

生活の学とは？ - 規制価値としての「生活」の位置づけ -

What is the study on human life? - human life as a value of regulation -

本田和子
HONDA Masuko

生活学における「生活」は、科学あるいはその他の諸学とどのような結び付きにおいて語られているのだろうか。それは限定された領域概念なのか、あるいは研究が奉仕させられる目標なのだろうか。こんな問題意識に捉えられるとき、今世紀の学術研究を展望した識者たちの諸種の論稿は、新しく一つの方向を示唆するかに見えて興味深いものがある。以下にその幾つかをパッチワーク的に繋いでみることにしよう。

「ここで一つの行動指針がある。自然についての対象知識がいわゆる理系の知である。一方、人間についての対象知識と、自然についての対象知識から意味を引き出す利用知識、実はこの二者は同じものであるのだが、それがいわゆる文系の知ということになる。すると、理系と文系とが統合する道は、対象知識と利用知識との組を再び復活するという、身近なところに見いだせるのではないかと考えられるのである。」(吉川弘之「対象知識と利用知識」)

「17世紀における近代科学の成立以来300年に亘って形成・維持されてきた正統派科学論の、ラディカルな転換が、21世紀科学の再編を促すことになる。」「すでに吉川弘之は、相互に無関連な<領域工学>の総体が、その予期せざる結果として地球環境破壊を初めとする<現代の邪悪なるもの>をもたらしたとする基本認識に立ち、工学において現代が対象とするすべてを人工物と一括して対象とする<人工物工学>を提唱している。私の言う人工物システム科学は、吉川の人工物工学を理系人工物から文系人工物にまで拡張し、文理を融合する人工物システム全体を対象にした認識=設計科学に他ならない」(吉田民人「21世紀科学の再編と社会学」)

「このような動きは、学術の中での科学の位置を巡る従来の考え方も変更させるような動きを示していることに注目しよう。一例を挙げてみる。最近急速にその存在を明らかにし始めた学問領域に<規制科学(regulatory science)>と呼ばれるものがある。ハーバード大学にこの講座が設けられ、ジャザノフという女性の教授が初代の地位に就いて話題を呼んだのもつい最近のことである。この規制科学という分野は、科学と銘を打ちながら、さまざまな社会的な要求のトレードオフの関係を組み込んで、最も合理的と思われる規制価値を<科学的>に提言するような営みを内包している。単に科学の内的な理論だけからは導き出せないような結果や結論を考慮することを、自らの課題としている趣があるのである」(村上陽一郎「21世紀における日本の学術研究」)

引用はこの程度に止めよう。そして、上記いずれもが、今後の動向として同じ方向を指し示すことに注目したい。すなわち、「科学」がこれまでのように科学者共同体の内部で自足的に営まれるだけでなく、一般の社会と有機的に結び付かざるを得ないこと、そして、このことが、人文・社会に亘る他の学問分野の再編にも繋がり、文理の融合を促進するのであろうということに……。とすれば、「生活学」は、「生活者」という科学者共同体の外部にクライアントを持つことにおいて、科学に期待されるであろう今後の方向性と結び付き、当初からその営みに従事していたということに気付かされよう。ただし、「生活」は、単に研究領域や目標を示す概念としてではなく、当然、それを規制する価値としても位置づけられるべきではないだろうか。

(お茶の水女子大学学長)